一番近い外国　韓国より

大阪大学大学院医学系研究科 社会医学講座 公衆衛生学
Department of Public Health, Yonsei University Graduate School

金子　文恵

2010年広島大学工学部卒業、製薬企業勤務を経て2021年3月大阪大学大学院医学系研究科修士課程修了、現在同博士課程。2022年3月より韓国延世大学校留学中。

みなさんこんにちは。大阪大学大学院医学系研究科 / 延世大学校の金子文恵と申します。縁と運に恵まれ、現在、韓国ソウルでの学生生活を満喫中です。留学生日記ということで、これまでについて、簡単に振り返ってみたいと思います。

はじめに

延世大学校は、1885 年に朝鮮王朝初の西洋医学の教育・実践機関として設立された廣惠院を基礎とするセブランス医科大学と、延禧大学校が統合されてできた総合大学です。大韓民国ソウル特別市の新村にキャンパスがあり、大学病院であるセブランス病院や歯科大学病院が併設されています。

私は、大阪大学のキャンパスアジア・ダブルディグリープログラムを活用し、2022 年 3 月に延世大学校に入学しました。当プログラムでは、2 つの協定校で正規の博士課程学生として履修と研究を行い、両方の大学にそれぞれ学位論文を提出、審査を経てそれぞれの大学から学位が授与されます。2 つの大学で学位を取得することに価値はあるのか？とよく質問を受けますが、博士課程の学生として、2 つの異なる研究環境でトレーニングを受ける中で得る経験と洞察には、価値があると考えています。

延世大のシンボル、アンダーウッドホール

機会の最大化

私は、博士課程中の学習機会を最大化できる、手の届く範囲で一番面白そうな選択肢として留学を選びました。学位取得後に何をするか、どんな可能性があるのかを模索する中で、大阪大学に在籍しながら日本以外の研究環境を経験できるダブルディグリープログラムでの留学は、良い機会だと感じました。実際には、留学先の疫学グループの教員の先生方は全員米国での研究経験があり、現在も国際共同研究を多数実施されているので、示唆に富んだお話を聞くことができます。また、学生や研究員は韓国国内出身者がほとんどで、就職事情や就労環境について情報交換することがあります。

昨年 12 月には、留学先の指導教員の先生に推薦していただき、心血管疫学の国際教育研修にも参加しました。研修の内容は割愛しますが、博士課程学生、ポスドク、教員など多様なキャリアの段階の参加者と情報交換することができ、とても刺激的でした。特に、アジアと欧米豪を移動して仕事をしてきた研究者たちが、口を揃えて、東アジアから出て仕事を探すことを勧めてくれたのが印象的でした。

また、留学中に追加で得られる経済的支援も、動機のひとつでした。私は、企業勤務を経て社会人学生として修士課程に入学し、学内で働きながら博士課程に進学しましたが、修士課程在籍中に、経済的な不安によって精神的に消耗した時期がありました。おかげさまで、今はほとんど心配なく研究に集中できています。特に、大阪大学に正規学生としての学籍があることで、卓越大学院プログラムや次世代研究者プログラムの履修が継続でき、さまざまな支援が得られているので本当に助かっています。

学生生活

延世大学校の博士課程では、学位論文とは別に、30 単位分の専門科目の履修と総合試験合格が必須です。ちなみに我々の課程は、3 月から 6 月、9 月から 12 月の 2 学期制で、1 科目 3 単位、1 コマ 3 時間が基本です。一方的な講義形式の授業は少なく、ほとんどの授業で 1 学期に 1 回から 3 回、多いものでは毎回、学生に発表の課題が与えられます。最初の 1 年間は、各学期それぞれ 10 回ほどの発表をしましたが、レポートや小テスト、試験もあり、空き時間の 3 分の 2 は授業の準備、残りで研究といった感じでした。2 年目からは、9 割が研究です。また、専門科目は、自身の専門である疫

インドでの研修セミナー

1987年の6月民主化抗争のモニュメント（詳しくは映画「1987」をぜひご覧下さい）

学の関連分野の講義を中心に履修しましたが、一部、他学部の院生向けの講義を履修することもできます。留学生を対象とした韓国の近現代史の講義を受けたり、ときどき神学部のチャペル礼拝に行ったりもしています。音楽学部の学生が演奏するパイプオルガンやコーラスの音色に、心が洗われます。

いま振り返る隔離生活

日本も韓国も、現在は感染症流行前とほとんど変わらない手続きで出入国ができるようになりました。しかし、留学当初は感染流行期だったため、なにかと大変でした。少し振り返ってみようと思います。

2022年2月中旬、新型コロナ感染症オミクロン株の流行が拡大するなか、ソウル仁川空港に到着しました。入国者には、位置情報を常時監視し、健康状態を毎日入力するアプリの使用が義務付けられていました。また、入国翌日と6日目のPCR検査が必須で、入国日、所管保健所(韓国国内の住所と紐付け)、隔離ホテル別に編成された5から10人ほどの入国者の集団ごとに、PCR検査場へのバスツアーが組まれました。現場が混乱することもあったようで、何度もバスツアー出発時刻が変更となり、朝10時出発予定だったところが、結局夜9時出発、気温マイナス10度の簡易検査所（テント）で結局2時間近くかかったのは、仕方がないとはいえ大変でした。

また、空港から隔離生活のどの場面においても、英語が流暢な20-30代男性の方が対応してくださったのがとても印象的でしたが、いわゆる兵役期間に業務に従事されている方々だったと後で知り、国の違いを実感しました。

その後晴れて隔離生活が明け、自由に行動できるようになりましたが、「韓国国内で有効なワクチン接種証明QRコードを持たない外国人」としての不便に直面します。当時、カフェをふくむすべての飲食店の入り口でワクチン接種証明QRコードの提示が必須だったのですが、外国人登録が完了するまで、発行ができません。大学の寮にはキッチンがなく、自炊も外食もできず、海外発行のクレジットカードではオンラインでの買い物もほとんどできないので、コンビニのキムパ(韓国海苔巻き)を食べる日々がしばらく続きました。韓国では、何もかもがWebやアプリ上や進められますが、外国人登録番号と銀行口座がないと何もできません。外国人登録が完了するまでの約2ヶ月は、何もかもがスムーズにいきませんでした。これらもまた、良い思い出です。

最後に

多様な人々の包含・協働の源泉は個人内での多様性ではないかと思っています。様々な人と出会い、経験を積み重ねる中で、洞察と直感を育てて守備範囲を広げていきたいです。